学位請求論文審査報告要旨

2013 年 3 月 13 日

申請者　　張　志剛
論文題目　現代日本語の二字漢語動詞の自他

論文審査委員　　庵　功雄
石黒　圭
井上　優

１．本論文の内容と構成

本論文の構成は以下の通りである。

第 1 章
1.1　研究動機
1.2　研究目標
1.3　先行研究から見た本研究の特色
1.4　研究対象
1.5　研究方法
第 2 章　二字漢語動詞の選定と概観
2.1　データ資料
2.2　二字漢語動詞の抽出方法と結果
2.3　二字漢語動詞の概観
2.4　「する」形式などを伴わない二字漢語動詞について
第 3 章　二字漢語動詞の自他
3.1　動詞の自他とは
3.2　自他の認定基準
3.3　二字漢語動詞の自他の使用状況
3.4　コーパスによって二字漢語動詞の自他を認定する際の問題点
第 4 章　二字漢語動詞の語構成
4.1　語構成の定義と構成項目
4.2　構成要素の品詞性および結合関係の判断方法
4.3　分類が難しい二字漢語動詞について
4.4　二字漢語動詞の語構成の概観
第 5 章　AV 型二字漢語動詞
5.1　研究対象
5.2　問題所在と解決方法
5.3　自他による動詞的要素の細分類

5.4　形容詞の細分類：変化の程度を表す「大きく」「激しく」について
5.5　形容詞的要素と動詞的要素との意味関係について―動補型において
5.6　修飾型の AV 型漢語動詞
5.7　動補型漢語動詞
5.8　まとめ
第 6 章　VN 型二字漢語動詞
6.1　研究対象
6.2　問題提起
6.3　考察
6.4　まとめ
第 7 章　VV 型二字漢語動詞
7.1　研究対象
7.2　問題の所在
7.3　問題の分析
7.4　考察
7.5　まとめ
第 8 章　その他の二字漢語動詞
8.1　考察対象
8.2　MV 型漢語動詞
8.3　接辞型漢語動詞
8.4　その他の漢語動詞
8.5　まとめ
第 9 章　VN 型二字漢語動詞の「骨折」と「骨を折る/骨が折れる」
9.1　問題の提起
9.2　データの概要と調査方法
9.3　調査の結果
9.4　考察
9.5　まとめ
第 10 章　和語複合動詞と対応する VV 型二字漢語動詞の意味と自他
10.1　問題の提起
10.2　考察対象及び先行研究の概観
10.3　調査
10.4　和語複合動詞と VV 型漢語動詞との自他使用
10.5　まとめ
第 11 章　日本語教育への応用
11.1　能力試験語彙リストにおける出現状況
11.2　日本語教育への応用の仕方(1)
11.3　日本語教育への応用の仕方(2)
第 12 章　今後の課題

12.1　本研究の研究結果
12.2　今後の課題
引用文献
参考文献

２．本論文の概要

本論文は全 4 部 5 章からなる。また、別冊の資料編がある。

第 1 部は本研究の基礎データと題され、4 章からなり、本論文における基礎データについて述べられる。

第 1 章では、本論文の研究課題が述べられる。それは次の 3 点、すなわち、「二字漢語動詞の自他および語構成を記述する」「二字漢語動詞の自他を決める規則を記述する」「日本語教育への応用を提案する」ということである。その上で、対象を二字漢語動詞に限定することに関して、漢語動詞全体の中で二字漢語動詞の占める比率が圧倒的に高いことなどが指摘されている。

また、研究方法が述べられる。まず、次の 4 つのコーパスを自作したことが述べられる。すなわち、「読売新聞データベース 8 年分のコーパス」「青空文庫コーパス」「大辞泉辞書コーパス（漢字の訓、意味、造語を調べる）」「漢字源辞書コーパス（漢字の意味、品詞性、造語を調べる）」である。次に、使用する検索ツールが紹介される。

第 2 章では、二字漢語動詞の抽出方法が紹介される。

第 3 章では、二字漢語動詞の自他の認定基準が紹介される。

第 4 章では、二字漢語動詞の語構成が紹介される。この語構成の観点から、分析対象となる 4315 語が分類され、分析される。

第 2 部は規則篇と題され、4 章からなり、二字漢語動詞の自他を決定するための規則について述べられる。

第 5 章では、AV 型二字漢語動詞（A：形容詞、V：動詞）が取り上げられる。

まず、この類型を「軽視」のように前要素である形容詞成分が動詞成分を修飾する修飾型（「軽く視る」）と、「拡大」のように前要素である動詞成分の結果として後要素である形容詞成分のようになる動補型（「拡げて大きくする／拡がって大きくなる」）に区別すべきことが述べられ、それぞれの場合における、形態素の配列からの自他の予測可能性の割合（「カバー率」）が提示される。さらに、例外的に見える部分に関しては、形容詞を細分化することでカバー率が高まることが示されている。

第 6 章では、VN 型二字漢語動詞（N：名詞）が取り上げられる。

まず、この類型を「読書」のように名詞成分が動詞成分と格関係を持つ補足型と、「音読」のように名詞成分が動詞成分と格関係を持たない修飾型に分けるべきことが述べられ、それぞれにおけるカバー率が提示される。次に、この段階では説明できない現象について、名詞成分が項を持つか否かという観点を導入し、そのことによってカバー率が向上することが示される。

第 7 章では、VV 型二字漢語動詞が取り上げられる。

まず、前項と後項の動詞成分の自他が一致している場合には全体の自他が高い確率で予測できることが示される。次に、それでは説明できない場合について、「他動性調和の原則」を考慮に入れるとカバー率が向上することが示される。最後に、以上の基準では説明できない場合に関して、個別に検討が加えられている。

第 8 章では、その他の二字漢語動詞が取り上げられる。

第 3 部は個別篇と題され、2 章からなり、二字漢語動詞の自他と和語動詞との関連性に関するケーススタディが提示される。

第 9 章では、「骨折する」と「骨が折れる／骨を折る」の関係が論じられる。

まず、「骨折する」は大部分が他動詞用法であること、対応する和語の表現としては「骨を折る」が多数を占めることが示される。次に、「を骨折する」の場合は、「手首を骨折する」のように「身体部位」が目的語に来ることが大半であるのに対し、「骨を折る」の場合は、「頭の骨を折る」のように「（身体部位）の骨」が目的語に来ることが大半であることが示される。さらに、「が骨折する」「が折れる」という自動詞用法は連体修飾用法にほぼ限定されるということも指摘されている。

第 10 章では、和語複合動詞とそれに対応する VV 型二字漢語動詞の意味と自他が論じられる。

VV 型二字漢語動詞の中には、「成立する―成り立つ」のように対応する和語複合動詞が存在する場合がある。なお、この場合、「成立する」のように意味が対応する場合と、「説得する―*説き得る」のように意味が対応しない場合とがあるが、それらを共に扱い、それぞれのカバー率を算出している。その結果、漢語と和語の意味が対応する場合は 90%を超える確率（カバー率）で、和語複合動詞の自他から二字漢語動詞の自他が予測できるのに対し、両者の意味が対応しない場合に予測できる確率（カバー率）は 70%程度にとどまることが示されている。

第 4 部は日本語教育への応用および今後の課題と題され、2 章からなる。

第 11 章では、本論文の内容の日本語教育への応用可能性が論じられる。

第 12 章では、本論文の成果が整理して提示され、合わせて、今後の課題について述べられている。

３．本論文の成果と問題点

本論文の評価すべき点としては、次の 4 点が挙げられる。

第一は、網羅性である。

本論文では､読売新聞データベース 8 年分の中に 1 例でも用例がある二字漢語動詞 4315 語全体を考察対象とし、その全ての語について、語構成、自他の別、自他両用の場合の自他の頻度差などをリストアップすることによって、現代日本語における二字漢語動詞の全体像を提示することに成功している。

第二は、体系性である。

本論文では、二字漢語動詞全体を「AV 型」「VN 型」「VV 型」「その他」に分け、それぞれについて、自他の決定要因を、語構成との関連の中でとらえている。また、各型に

おける自他の決定過程がフローチャート化されており、それぞれの段階でのカバー率も算出されている。

第三は、記述の明示性と客観性である。

本論文では、二字漢語動詞の選定方法、自他の決定方法が機械化（自動化）されており、追試が容易になっている（二字漢語動詞の抽出プログラムも公開されている）。これまでの自他の選定には恣意的な点がまま見られ、複数の辞書において、自他の記載が異なるといったことがあったが、本論文では、分析手順を客観化し、分析者の主観を可能な限り排した分析を行うことで、そうした問題点を克服している。同時に、頻度の少ないものについては青空文庫のデータを参照するなど、コーパス研究における問題点の克服にも目配りがなされている。

第四は、量的記述と質的記述のバランスの良さである。

本論文は、基本的には量的研究手法をとりつつも、それだけでは解決できない点については、質的研究手法も取り入れており、両者の融合が適度なバランスでなされている。例えば、量的研究と質的研究を融合させることによって、これまで議論の焦点の 1 つであった VN 型における「外部表示」の問題（「飲酒」の「酒」も「給油」の「油」もともにヲ格であるのに、「*ビールを飲酒する」とは言えないのに対し、「ガソリンを給油する」とは言えるのはなぜかといったこと）に関して、非常に有力な見解を提出している。

以上のような特徴から得られた本論文の成果は、次の 2 点にまとめられる。

第一の成果は、現代日本語の二字漢語動詞の自他の全体像を取り出して見せたということである。これまでの当該分野における代表的な先行研究としては、小林英樹『現代日本語の漢語動名詞の研究』（ひつじ書房）があるが、同書が二字漢語動詞を理論的に整理したものにあるのに対し、本論文は二字漢語動詞を記述的に、すなわち、網羅的かつ体系的にとらえたものであり、同書が理論化の過程でそぎ落としていった部分をも丁寧に記述している。本論文を得たことで、現代日本語の二字漢語動詞の研究は明らかに一つの具体的で確かな成果を手にしたと言える。そして、その成果は、日本語教育や自然言語処理といった領域における研究に対して上質のデータを提供することになると思われる。

第二の成果は、本論文が研究課題として立てている、「なぜ、日本語母語話者の自他の判断は（基本的に）一致するのか」という問いに対して、形態素の意味および統語的性質と語構成という表層的に得られる情報のみからその解答を与えようと試み、それに相当程度成功しているという点である。和語の場合は、「割れる（自）―割る（他）」のように、自他が（基本的に）形態的にわかるようになっているが、漢語の場合は、形態的指標は「する」で自他に共通であるので、それだけでは自他の区別はわからない（はずである）。にもかかわらず、母語話者の自他の判断は相当高い率で一致する。このことは、日本語学的に見て、説明されなければならない現象であるにもかかわらず、これまでの研究では、全くと言っていいほど問題として取り上げられてこなかった。本論文は、この問題に対して、各型における「カバー率」を算出することによって、解答を与えている。本論文が与えた「解答」は完全なものではなく、部分的には未完成の部分も存在するが、上記の問題を日本語学が解答を与えなければならない問題として取り上げ、それに対して、定量的かつ客

観的な手法で一定の解答を与えたことは今後の当該の研究に与えるインパクトという点から見ても特筆すべきことである。

これ以外にも、随所に先行研究では指摘されていない言語事実の掘り起こしが行われている。1 例を挙げると、「拡大」のような自他両用動詞の場合、「プラスの事象」の場合は他動詞になり、「マイナスの事象」の場合は自動詞になるという傾向があることが指摘されている（例えば、「活躍の機会を拡大する（他）」「被害が拡大する（自）」）。

このように高く評価できる点を含む本論文であるが、問題点もいくつか存在する。

第一の問題点は、機械的な分析を一貫させることを重視するあまり、無理に形態素に分割していると見られる場合があることである。例えば、「所有」は「その他」の型のうちの「sV 型（s：接辞）」とされている。これは「所」が「ところ」という意味を失っていると（機械的な手順において）判断されたためであるが、日本語母語話者の言語直感とは合わない印象を受ける。

第二の問題点は、日本語教育への「応用」ということをやや安易に語りすぎているという点である。本論文で提示されているフローチャートは体系的な記述という点では優れたものであるが、規則としてはまだ十分に操作的なものにはなっていない。日本語教育への応用ということを語るのであれば、本論文の成果をもとに、発想を変えた学習者向けのシラバスを考えるべきであろう。

以上のような問題点は、しかしながら、本論文が掘り起こした成果を損なうものではない。例えば、第一の問題点は、客観的な記述に徹するという本論文の姿勢からある意味で必然的に出てくるものであるし、第二の問題点についても、自然言語処理という点からすれば、本論文の成果は今すぐにでも応用可能であると思われる。

また、筆者自身もこれらの問題に関する十分な認識を持っており、今後の筆者自身の研究の中でより昇華された形でその解答が与えられることが十分に期待できる。

４．結論

以上から、本論文は学位論文としての十分な水準に達しており、筆者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考える。

最終審査結果の要旨

論文審査委員　　庵　功雄
石黒　圭
井上　優

2013 年 2 月 20 日、学位請求論文提出者、張志剛氏の論文「現代日本語の二字漢語動詞の自他」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、張志剛氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、張志剛氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。